番組

宝生流　連吟（能楽ワークショップ清香会）

東北（とうぼく）

金剛流　連吟（東雲会）

井筒（いづつ）

喜多流　連吟（広島明生会）

羽衣（はごろも）

観世流　連吟（広島集杉会）

竹生島（ちくぶしま）

宝生流　連吟（令和八年度能楽ワークショップ「能楽入門講座」受講生）

土蜘（つちぐも）

（十時三十分頃）

喜多流　能学習発表 令和八年度こども能楽ふれあい教室受講生

西王母（せいおうぼ）　キリ

宝生流　連吟（能楽ワークショップ緑樹会）

俊寛（しゅんかん）

喜多流　仕舞（広島明生会）

芦刈（あしかり）

鞍馬天狗（くらまてんぐ）

大江山（おおえやま）

田村（たむら）　キリ

観世流　連吟（ワークショップ若竹の会）

船弁慶（ふなべんけい）　クセ

宝生流　連吟（能楽ワークショップ羽衣会）

鉢木（はちのき）

（十一時二十分頃）

喜多流　独吟（広島喜雲会）

井筒（いづつ）

金剛流　連吟（豊雲会）※幼稚園児・小学生

羽衣（はごろも）

敦盛（あつもり）

金剛流　仕舞（豊雲会）※幼稚園児・小学生

羽衣（はごろも）キリ

敦盛（あつもり）キリ

敦盛（あつもり）キリ

観世流　仕舞（広島集杉会）

羽衣（はごろも）キリ

（十二時二十分頃）

喜多流　連吟（広島喜長会）

鬼界島（きかいがしま）

特別企画　能楽ガイド★広島

『能楽』の魅力を四流の能楽師が解り易くガイダンス

（所要時間三十分程）

観世流能楽師　津田和忠
宝生流能楽師　石黒実都
金剛流能楽師　豊嶋晃嗣
喜多流能楽師　大島衣恵

宝生流　仕舞

小歌（こうた）

観世流　連吟（ワークショップ弥生会・好謡会）

二人静（ふたりしずか）　クセ

（十三時頃）

喜多流　連吟（広島喜雲会）

女郎花（おみなめし）

金剛流　連吟（豊雲会）

杜若（かきつばた）

観世流　仕舞（広島上田観正会）

清経（きよつね）　キリ

二人静（ふたりしずか）　クセ

喜多流　連吟（広島大島会）

鬼界島（きかいがしま）

宝生流　仕舞

鵜之段（うのだん）

三山（みつやま）

（十四時十分頃）

喜多流　仕舞（広島大島会）

草紙洗小町（そうしあらいごまち）

羽衣（はごろも）　クセ

融（とおる）

観世流　仕舞（広島觀風會）

経正（つねまさ）

放下僧（ほうかぞう）　小歌

花筐（はながたみ）　クルイ

宝生流　仕舞

蝉丸（せみまる）

巻絹（まきぎぬ）　キリ

喜多流　連吟（広島明生会）

大江山（おおえやま）

宝生流　連吟（古流会）

源氏供養（げんじくよう）

観世流　連吟（広島観昭会）

海士（あま）　玉の段

喜多流　仕舞（広島喜雲会）

羽衣（はごろも）

観世流　連吟（広島上田観正会）

放下僧（ほうかぞう）

（十五時四十分頃）

宝生流　仕舞

田村（たむら）　キリ

経政（つねまさ）　クセ

金剛流　連吟　豊雲会

花月（かげつ）

観世流　独吟（広島觀風會）

実盛（さねもり）　キリ

宝生流　連吟（能楽ワークショップ紅葉の会）

楊貴妃（ようきひ）

附祝言

（十六時二十分頃）

（十七時頃終了予定）

仕舞あらすじ解説

西王母（せいおうぼ）／喜多流

古代中国の仙女・西王母が三千年に一度実る不老不死の霊桃を周の穆王（ぼくおう）に捧げ、天下泰平と長寿を祝福する、明るく華やかな祝言曲を舞います。

芦刈（あしかり）／喜多流

貧苦の末に生き別れた夫婦の愛情と再会を描いた心温まる物語。

生活を立て直した妻が故郷（大阪の摂津の国）を訪ね、落ちぶれて芦を売りながらも前向きに生きる夫と偶然再会し、再び連れ添って都へ帰るハッピーエンドの物語。

鞍馬天狗（くらまてんぐ）／喜多流

鞍馬山で修行中の牛若丸（後の源義経）と彼に兵法を授ける大天狗との心温まる交流を描いた作品。前半の華やかな花見の場と、後半の勇壮な兵法伝授の場面が対比的である。

大江山（おおえやま）／喜多流

源頼光をはじめとする武将たちが、帝の命を受け、修験者（山伏）に変装して丹波の国の大江山に立てこもる鬼「酒呑童子」を退治するダイナミックで華やかな物語。

田村（たむら）／喜多流

春の桜の満開の清水寺、旅の僧が寺を護る少年に出会い、後に現れた武将・坂上田村麻呂の霊が、千手観音の加護のもとで悪鬼を退治した武勇伝を語り、舞う。

羽衣（はごろも）／金剛流

漁師の白龍は三保の松原で美しい衣を見つけるが、それは天人の羽衣であった。天人に返してくれと求められ、白龍は「天人の舞楽」を舞うことを条件に衣を返す。羽衣をまとった天人は富士山を背に、緑美しい三保の松原で天女の舞を舞い、やがて夕日で富士が染まる頃、天上界へと帰っていく。三番目物

敦盛（あつもり）／金剛流

一ノ谷の合戦で、当時十六歳の平家の公達平敦盛を討ちとった熊谷直実は、あまりの痛ましさに無常を感じ、武士を捨て出家し蓮生と名乗る。敦盛の菩提を弔うため、再びかつての戦場、摂津国一ノ谷を訪れる。蓮生が夜もすがら念仏を唱え弔っていると、武将姿の敦盛の亡霊が現れ仇を討とうとするが、後生を弔ってくれる今の蓮生法師は敵ではないと、回向を頼み立ち去るのだった。　二番目物

羽衣（はごろも）／観世流

春の朝、富士山の近く、三保の松原に仕む漁師・白龍は、松の枝に掛かった美しい衣を見つけます。白龍が持ち帰ろうとすると、天人が現れて声をかけ、その羽衣を返して欲しいと頼みます。白龍は、天人の舞を見せてもらう代わりに、衣を返すことにし、天人は約束通り月世界の舞を見せます。仕舞は、羽衣を着た天人が、月宮の様子、春の三保の松原の美しさを舞語り、やがて夜明けと共に空へ帰っていく場面を致します。

小歌（こうた）／宝生流

能「放下僧」の一部を舞います。遊狂の徒「放下」に身をやつして親（牧野左衛門）の仇（利根信俊）を討つ兄弟を主役（シテ・ツレ）とする現在物かつ直面の能である。放下は、中世に流行った一種の物狂いで、浮かれ興じて謡い舞う遊興の徒で、鞨鼓、小歌ですっかり気を許した敵を討つのだが、

仕舞は、この小歌に合わせ舞います。　四番目物

清経（きよつね）キリ／観世流

平清経の妻のもとに、夫が戦への絶望から海に身を投げたという報せが届きます。妻が夫を恨み泣き伏していると、その夜、妻の夢に清経の霊が現れます。妻は再会を喜ぶ間もなく、清経の自死について責めますが、清経が敗北を悟って入水した最期の様子を語ると、妻は涙を流します。清経は死後、堕ちた修羅道の凄惨な有様を舞語り、しかし最後は入水の前の念仏によって成仏できたことを伝えて別れを告げます。

仕舞では、清経の修羅道を物語る最後の場面を演じます。

二人静（ふたりしずか）クセ／観世流

神前に菜の新芽を供える一月七日。奈良県吉野山にて、菜摘の女が幽霊に取り憑かれ昔語りを始めます。幽霊の正体は静御前――源義経の想い人でした。女が静の生前の舞装束を身に纏うと、隣に同じ格好をした女性――静の幽霊がぼんやりと浮かびます。兄、源頼朝に追われる源義経との逃避行等、悲しい記憶を舞い語り、自らの供養を願うのでした。

仕舞では、義経と逃げた吉野山での心情と情景を舞い語る場面を致します。幽霊の静と取り憑かれた女の相舞（二人での舞）が見どころです。

鵜之段（うのだん）／宝生流

能「鵜飼」（うかい）は、禁漁の罪を犯したために殺された漁師の悲劇と、その鵜飼の業の見事さ、そして「法華経」による救済を描いています。鵜之段はこのうち、鵜を捕える姿を演じてその楽しさを見せ、やがて篝火も消え終わる名残惜しさを表現しています。　五番目物

三山（みつやま）／宝生流

大原の良忍聖は大和三山の中、耳無山のほとりで一人の女に呼びとめられる。女は三山物語を語り、桂子と名乗り回向を頼み消え失せる。弔いの内、桜子と桂子の霊が現れ争うが、やがて上人の念仏を受け恨みを捨てて共に成仏してゆく。　四番目物

草紙洗小町（そうしあらいごまち）／喜多流

宮中での御歌合せの会で大伴黒主の相手は小野小町と決まります。小町は歌の名手。勝てそうにないと黒主は小町の私宅に忍び入り、小町が翌日の為に歌を吟じるのを盗み聞き、それを万葉集に書き入れます。歌会の場で小町が歌を披露すると黒主は「それは、万葉集にある。」と訴えますが、黒主の草紙を洗うと書き入れた歌だけが消え、小町の無実が明らかに。小町は黒主を許し、帝の前で喜びの舞を舞います。

仕舞は、最後の大団円。小町が晴れ晴れと国の平安を祝い、和歌の徳を讃え、舞う様子を描きます。

羽衣（はごろも）クセ／喜多流

三保の松原の漁師白龍が、朝の浜辺で春の長閑な景色を眺めていると、虚空に花が舞い音楽が流れ良い香りまでします。見廻すと松に美しい衣が。家の宝にと、持ち帰ろうとすると一人の女性が自分のものだから返してほしいと頼みます。天に帰れないと悲しむ姿に、白龍は天人の舞を見せてくれるならと、約束します。喜んだ天人は衣を着、月世界の舞を舞いながら空へ空へと帰って行きました。

仕舞は、天人が羽衣を着し、音楽が美しく流れる中、舞う様子を描きます。

融（とおる）／喜多流

「融」とは、源融。八二二年嵯峨天皇の皇子として生まれ臣籍に下りましたが、左大臣にまで上った実在の人物です。旅僧が「融」の広大な邸宅「河原院」跡で休んでいると汐汲みの老人が現れ往事の庭園や、そこでの風流の有様を語ります。夜、廃園で旅寝する僧の前に融大臣が昔のままの姿で現れ、

かつての華やかな時代を偲び名月の下で舞い、夜明けと共に消えたのでした。
仕舞は、曲の最後の場面。融は月に縁のある事を様々語り、天は天、地はどこまでも地などと謡い舞い、夜明けと共に消える有様を描きます。

経正（つねまさ）クセ／観世流

僧都行慶は、孫のように可愛がっていた経正の戦士を嘆き、弔いの宴を催していると、そこへ経正の霊が現れ生前の様子を語り、弔いによって成仏できた事を告げて消え失せます。

放下僧（ほうかぞう）小歌／観世流

父の仇、利根信俊を討つため兄弟二人は芸人に扮して酒宴の席にて舞い、その面白さに気を許したすきに見事父の仇討ちを成し遂げます。

花筐（はながたみ）クルイ／観世流

大迹部の皇子は、天皇に即位することになり、寵愛していた照日の元を去り都へと向います。後に照日の前は帝の行列と行き会い、その場にて舞を舞い、謡を謡うことにて二人は目出度く再会を果たしました。

蝉丸（せみまる）／宝生流

「蝉丸」は、延喜帝の第四皇子である盲目の皇子・蝉丸の物語です。彼は父の命令により逢坂山に捨てられ、清貫によって出家させられます。蝉丸は琵琶を弾きながら自らの運命を嘆き、博雅三位が彼を慰める藁屋を作ります。一方、蝉丸の姉である逆髪は狂人となり、逢坂山にやってきます。二人は互いの境遇を語り合い、最後には涙ながらに別れを惜しむのです。　四番目物

巻絹（まきぎぬ）キリ／宝生流

音無の天神の乗り移りし巫女は和歌の徳を褒め称えながら舞い、さらに勅使の願いに応じて祝詞をあげ、神楽を舞います。　そのうちに激しい神がかりとなっていきます。御幣も乱れ、飛び上がり、地に臥せるなど激しく狂い舞った後、やがて憑いていた神が上がらせられたと見え、巫女は正気に立ち戻るのでした。　四番目物

羽衣（はごろも）／喜多流

三保の松原の漁師　白龍が、朝の浜辺で春の長閑な景色を眺めていると、虚空に花が舞い音楽が流れ良い香りまでします。見廻すと松に美しい衣が…。家の宝にと、持ち帰ろうとすると一人の女性が自分のものだから返してほしいと頼みます。天に帰れないと悲しむ姿に、白龍は天人の舞を見せてくれるならと、約束します。喜んだ天人は衣を着、月世界の舞を舞いながら空へ空へと帰って行きました。

田村（たむら）キリ／宝生流

僧が夜通しで桜の木陰で経を読んでいると、威風堂々たる武将姿の坂上田村麻呂の霊が現れます。そして、勅命を受けて、鈴鹿山の賊を討伐すべく軍を進めたが、合戦の最中に千手観世音が出現し、その助勢によって、敵をことごとく滅ぼした様子を語り、これも観音の仏力であると述べます。　二番目物

経政（つねまさ）／宝生流

琵琶の名手平経政は、お仕えする御室仁和寺の守覚法親王に拝借した名器「青山」を返して出陣。　戦死の報をきいた親王は憐れんで管絃講を営んで弔うと、かすかな灯火のかげから経政の亡霊が出現する。　二番目物

能の基礎知識

（公益社団法人能楽協会ウェブサイトから一部抜粋したものを記載）

能とは？

室町時代（14世紀）に成立した能は、六百年を越える歴史の中で独自の様式を磨き上げてきた日本の代表的な古典芸能であり、同時に、現代に生きる世界の演劇の一つでもある。その特徴を一言で言えば、面と美しい装束を用い、専用の能舞台で上演される歌舞劇、とまとめることができるだろう。

能舞台の上では、日本版コメディの狂言も演ぜられる。能と狂言は源を同じくし、同じ能舞台の上でそれぞれ別の側面を発展させてきた。能が歌舞劇として、どちらかと言えば人間の哀しみや怒り、懐旧の情や恋慕の想いなどを描くのに対し、狂言は笑いの面を受持ち、科白劇として洗練を重ねてきた。また狂言の役者は能の中で一役を担ってもいる。狂言については別記事で述べることにし、以下しばらくは能に限定して解説する。

※別記事 URL　https://www.nohgaku.or.jp/guide/ 狂言の基礎知識

代表的な役柄

能にはどんな役が登場するのだろうか。現在の上演曲目はおよそ２４０曲、そのうち普通演じられるのは１２０曲ぐらいだが、能の筋書きは非常に単純で、登場人物も類型化されている。代表的な役柄には『源氏物語』『伊勢物語』などの古典文学に登場する優美な男女の霊、『平家物語』で語られる「源平の戦」で死んだ武将の霊、地獄に堕ちて苦しんでいる男女の霊、というように、幽霊が多い。また、松や桜など草木の精、各地の神々、天女、天狗、鬼など、人間以外のものも多く登場する。こうしたものたちが人間の世界に現れ、我々と交渉を持つのである。

もちろん、現実に生きている人間が主人公の能もたくさんある。白拍子のような芸能者、曾我兄弟や義経、弁慶などのヒーローが、さまざまなドラマを繰り広げるほか、別れ別れになった親子や夫婦の物語では市井の人々が主役となる。中国ネタの能も多いので中国人も登場するが、外国人であることは出立で示すのみで演技に違いはない。

演者の役割分担

以上のような作品群を演ずる人々の側にも、いくつかの役割分担がある。

能では主役のことをシテという。能は徹底した「シテ中心主義」で、美しい衣装も面も観客の目を引きつける舞も、ほとんどがシテのものである。また、上で述べた代表的な役柄もシテが演ずるのがふつうである。そのシテと応対し、シテの演技を引出す役をワキと呼ぶ。すべて現実に生きている成人男子で、面をつけることはない。僧や神官、天皇の臣下などの役が多い。

シテを演ずる人たちのグループ（シテ方）と、ワキを演ずる人たちのグループ（ワキ方）はまったく別のグループで、シテ方の役者がワキを演じたりワキ方の役者がシテを演じたりすることはない。シテ方の役者は、シテやその助演的役割のツレを演じるほか、地謡（コーラス）を受け持つ。地謡は、情景や出来事、登場人物たちの心理などをナレーション的に描写するほか、ときにはシテやワキになりかわって、彼らのセリフを謡うこともある。

曲によっては子供が登場することもあり、子方と呼ばれる。子供の役を演ずるだけでなく、天皇や源義経の役など貴人の役も演ずるのが、能の子方の特徴である。たとえば〈船弁慶〉の義経は、シテやワキが表現する愛情・忠誠心・恨み等々の向かう先のいわばマークとしてのみ存在している。そうした義経の存在感が強くなりすぎぬよう、あえて子方を用いるのである。

楽器は、笛・小鼓・大鼓と、曲によって太鼓が用いられる。能の囃子は単なる伴奏音楽ではない。シテの演技や地謡等とともに、一曲の世界を作り上げるための大切な要素である。初めて能を観る人は、特に打楽器の掛声に驚くかもしれないが、この掛声自体、能の音楽の一部をなし、内容や場面にあった情趣を生み出している。唯一のメロディー楽器である笛も、ただ美しく旋律を奏でるというよりは、各場面にふさわしい情趣を醸し出すような演奏をする。

掛声とともに重要視されるのが、「間」と呼ばれる、楽器の音のしていない部分である。音は聞こえなくても、演奏者はただ休んでいるのではなく、そのあいだも舞台上には力が充実している。

狂言の役者も、能の中に登場する。物語の舞台となる土地の住人や、シテ・ワキなどの家来などに扮し、前後の場面をつないだり、筋書を進めたりする役で、アイと呼ばれる。

【参考】公益社団法人能楽協会、「能の基礎知識」、https://www.nohgaku.or.jp/guide/能の基礎知識、（入手日：令和六年八月七日）